

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 語り手のトリックから解く村上春樹『1Q84』—牛河という人物を中心に—
以「牛河」與敘述者所設計的機關來解讀村上春樹《1Q84》

doi:10.6205/jpllat.29.201106.01

台灣日本語文學報, (29), 2011

作者/Author：曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page：3-27

出版日期/Publication Date：2011/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.29.201106.01>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



以「牛河」與敘述者所設計的機關來解讀村上春樹《1Q84》

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

摘要

村上春樹最新作品《1Q84》(BOOK1、BOOK2、BOOK3)分成三冊，於2009、2010兩年間發行。單2009年一年，長年不景氣的日本出版界，因為該書的發行而業績長紅。而在日本的社會也引發一陣瘋狂、騷動。

就小說的構成而言，BOOK1、BOOK2的奇數章與偶數章各自敘述著男女主角天吾、青豆的故事。而BOOK3則多加入一位名為「牛河」的主角，展開三邊鼎立局面。然而心加入的主角「牛河」卻於中途被殺身亡。遭逢如此境遇的「牛河」的出現，又到底代表甚麼樣的意義呢。為究明此疑問，貫通BOOK1、BOOK2、BOOK3閱讀之後，發現敘述者於作品中設計了「時間結構」與「主要人物配置」兩個機關。

從敘述者所設計的「時間結構」與「主要人物配置」兩個機關中，釐清《1Q84》之所以能富有偵探小說風格的小說，主要是主角「牛河」連結了所有的片斷，是一位作品中不可或缺的重要人物。進而透過與漱石偵探小說風格的小說《直至彼岸》(1912)相比較，也察覺出被夙稱「80年代的漱石」的村上春樹《1Q84》中，亦有漱石嘗試使用的「立體的描繪」、「偵探小說風格的遣詞用句」、「連結於偵探後的戀愛故事」等3種手法。特別是「立體的描繪」，更可謂是常用二元對立方式描繪的村上春樹文學上的一大突破性的進展。

關鍵字：《1Q84》 「牛河」 機關 漱石《直至彼岸》
「立體的描繪」

Haruki Murakami's '1Q84' deciphered from narrator's tricks: From view point of the person named Ushikawa

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Haruki Murakami's new work '1Q84' (BOOK1,BOOK2,BOOK3) is completed. This publication not only has enlivened the publishing world in Japan but also called the big topic also in Japanese society.

As for '1Q84', another hero Ushikawa is installed in BOOK3 in addition to Aomame and Tengo that appeared alternately in the chapter of the odd number and the even number chapter of BOOK1 and BOOK2. However, this Ushikawa that had appeared newly is killed during the novel. It has been understood that there are two tricks which the narrator planned mainly. These tricks are one of the arrangement of time structure and another of the rule as the kingpin from whom Ushikawa has done in the work.

It has been understood that '1Q84' is tailored in the pursuit story style. Moreover, Ushikawa is ties the fragment of the story and an important person like a stopped screw. In addition, '1Q84' has the common feature with Soseki's detective style novel 'Higansugimade' (1912). A three-dimensional description in '1Q84' is admitted as Haruki Murakami's epoch-making writing in Haruki Murakami literature.

Keyword: '1Q84', Ushikawa, trick, 'Higansugimade',
three-dimensional description

語り手のトリックから解く村上春樹『1Q84』

—牛河という人物を中心に—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

要旨

村上春樹の最新作『1Q84』(BOOK1、BOOK2、BOOK3)の三冊が二年間(2009.2010)をかけて、刊行された。発行された当初の2009年の一年間、長年不景気に苦しんだ日本の出版界を賑わしただけではなく、日本社会でも大きな話題を呼んだ。

小説の構成については、BOOK1、BOOK2の奇数章と偶数章に交互に登場した青豆、天吾に加えて、BOOK3では、もう一人の主人公牛河が設けられた。しかし、この新しく登場した牛河は、小説の終盤に至らないうちに、途中で殺されてしまった。このような牛河の登場の意味を突き止めるため、牛河を中心に『1Q84』BOOK1、BOOK2、BOOK3全編を通して読んだところ、語り手が作品中仕組んだ時間的構造と中心人物の配置の二つのトリックがあることが分かった。

語り手が仕掛けたトリックから『1Q84』を追跡物語風(探偵風小説)に仕立てる上で、牛河が物語の断片を繋ぎ止める螺子のような重要な人物だということが判然した。さらに、漱石の探偵風小説『彼岸過迄』(1912)との比較を通して、「80年代の漱石」と呼ばれた村上春樹の『1Q84』にも、漱石が試みた立体的描写、探偵風小説の言葉遣い、探偵後の恋愛話への展開の3つの手法が見られる。立体的描写は、今まで二元対立的描写がよく見られた村上春樹文学においても、村上春樹の画期的な書き方だと認められる。

キーワード：『1Q84』 牛河 トリック 漱石の『彼岸過迄』
立体的描写

語り手のトリックから解く村上春樹『1Q84』

—牛河という人物を中心に—

曾秋桂

淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

BOOK1、BOOK2(以下 I、II と略称する)の二冊の形で刊行された村上春樹の最新作『1Q84』(2009)は話題を呼ぶ作品¹となった。さらに『1Q84』は2010年にBOOK3(以下、III と略称する)が出版され、一つの完成した物語の姿を現した。

物語の構造を見ると、『1Q84』は、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(1985)、『海辺のカフカ』²(2002)に続き、二つの話しが交互に奇数章と偶数章に展開していく構造を採っている³。しかし、第一人称で語った『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』、『海辺のカフカ』とは違い、『1Q84』のIとIIは、第三人称で語った主人公青豆と天吾の物語である。しかし、『1Q84』のIIIになると、IIの第2章に初登場した牛河を独立させ、牛河、青豆、

¹ 風丸良彦(2010)『集中講義『1Q84』』若草書房 P3-4 では、「発売後最初の週末となった五月三十日(土曜日)には、紀伊国屋書店新宿本店で五十五秒に一冊のペースで売れたそうです。(中略)発売直後からの反響や、その後、この年の暮れに至るまでつねにベストセラー・リストの上位に入り続けていたという状況(『ハリー・ポッター』などは、発売後、二、三週間でベストセラー・リストの上位から消えていきました)は文字通り前代未聞で、世を驚倒させました」とある。

² 奇数章と偶数章のほかに、『海辺のカフカ』の冒頭及び第46章と47章との間に1回ずつ「カラスと呼ばれる少年」という章が仕込まれている。

³ 奇数章と偶数章でという並行関係で進む物語は早く見られる『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(1985)の創作方法については、井上ひさしは「謎と発見」(1997)『群像日本の作家 26 村上春樹』小学館 P171 では「この小説(『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』のこと・論者注)には<私>と<僕>との二人の主人公がいて、この二人がそれぞれ一つずつ物語を牽引する。物語の運転手を複数にするという構造のつくり方はこの作者(村上春樹のこと・論者注)の愛する方法でわれわれ読者にもすでに親しいところであるが、この方法は謎の発生を容易にする」と指摘している。

天吾を順番に各章の中心人物とし、物語を進行させている。そして、最終章である第 31 章のタイトル「青豆と天吾」が示しているように、青豆は天吾と再会し、一緒に「1Q84 年」の世界から脱出できた。だが、もう一人の中心人物牛河は第 25 章で殺されてしまったのである。『1Q84』には多くの登場人物がいるにもかかわらず、青豆、天吾と一時は同列に扱われ、章のタイトルにも命名されたにもかかわらず、結局殺されてしまった牛河の存在の意味は作品を読む場合、当然問われよう。確かに「この男のあとを辿っていくことによって、私は天吾のいる場所に行き着けるかもしれない。この男が逆に私のために案内役をつとめてくれるわけだ」(Ⅲ、P407)と青豆が言ったように、牛河の存在の意味は青豆が天吾との再会を果たすことができた「案内役」であった所に認められるが、牛河の存在は果たしてただ青豆が言った「案内役」に止まっているのであろうか。

牛河を中心にして『1Q84』全編(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)を通読していくと、牛河には「案内役」という以上に、作品の中での構造的深層的な意味があり、その存在は『1Q84』における時間的構造と中心人物の配置において語り手がストーリーの進行上に仕組んだトリックを浮かび上がらせている。そこで、本論文では『1Q84』の時間的構造、人物配置をまず解明し、それによって語り手が物語に仕掛けたトリックを把握する。そこから牛河という人物の存在意味を明らかにする。さらに、一種の探偵小説として読まれてきた漱石の『彼岸過迄』との比較を通して、村上春樹文学における『1Q84』の特性を浮き彫りにしてみたい。

2. 『1Q84』のⅠ、Ⅱ、Ⅲの時間的構造

まず、『1Q84』のⅠ、Ⅱ、Ⅲの時間的構造を見ていこう。

2.1 『1Q84』のⅠに見られる時間的推移

青豆と天吾の名で交互に名づけられた『1Q84』Ⅰ(全 24 章)の奇数章と偶数章では、時間設定が明白に示されていない。そのため各章のストーリーが同時進行しているのかどうかは把握できないが、

過去を回想しながらも、物語内の時間的推移は逆戻りせずに、決まった方向に流れて物語が進行していることは確実である。

2.2 『1Q84』のⅡに見られる時間的推移

Iとは違って、『1Q84』Ⅱ(全24章)は終盤に近づくにつれて、奇数章と偶数章で語られた物語内の時間的推移が確定できるようになっている。天吾を軸とする第6章、第8章を除いたⅡの第5章以後の物語が共時的に進行していることが一つの特徴として認められる。その時間的推移を図式にすると、以下の図(1)になる。

図(1) 『1Q84』のⅡの各章に見られる共時性



青豆の奇数章に関して見ると、Ⅱのクライマックスとも言える宗教団体「さきがけ」のリーダー殺しの計画実行は、第⑤章で9月初めのある「月曜日」にリーダー殺しを頼んだ老婦人のボディガードに当たるタマルという人物が、青豆に計画を知らせたことから始まる。第⑦⑨⑪⑬⑮章の5章では、同じ「月曜日」の当日、「雷鳴」が轟いている中で青豆はリーダー殺しの計画を実行できた。その翌日の「火曜日」、青豆は第⑰⑱㉑の3章で語られたように新築のマンションで暮らし、次の「水曜日」に第㉓章で「首都高速道路三号線乗り」に行き、タマルという人からもらったピストルで自殺を図ろうとしたのである。

それに対して、天吾の偶数章では、第⑩章で夕方「六時前」(P202)父の療養所から高円寺のアパートに帰った天吾を、その前からずっと泊まりに来ているふかえりが待っている。当日の夜「九時に近くなっ」(P263)た頃、ふかえりは天吾のベッドに入った。同じ日の第⑫⑭章の2章では「雷鳴」が轟いている中、二人はセックスをした。

後のⅢ⁴で明らかにされているように、実はこのセックスの場面で天吾はふかえりとセックスしたのではなく、ふかえりを「通路」にして青豆と連結し子供を懐胎させたのである。このことから考えると、「雷鳴」が轟いている中で天吾がふかえりとセックスした場面は、「雷鳴」が轟いている中で青豆がリーダーを殺した「月曜日」の同じ時間帯に起こった出来事に違いない。ここから、ふかえりという通路を通じて青豆との関係が出来た天吾が、この日から青豆を探すことを決心した理由が理解できよう。翌日の「火曜日」の第⑩章では、天吾は電話局の本局に行き青豆の行方を調べた。同じ「火曜日」の第⑩⑪章の2章では、天吾は月を目当てに児童公園まで辿りついて、公園の滑り台に上がって二つの月を眺めた。第⑪章で触れたように、その姿を青豆は見かけた。「火曜日」の夜の第⑫章では、父の病状が穏やかではないため、療養所から電話をもらって、翌日の「水曜日」に父の療養所へ出掛けた。第⑫章では、その療養所で「美しい十歳の少女」(Ⅱ、P498)の姿をした青豆のさなぎを見て、「青豆」(Ⅱ、P498.499.500)と3回呼びかけた。その時、青豆は「遠い場所」(P499)、すなわち第⑫章で語られたように「首都高速道路三号線上り」(P464)の所で、自殺を図ろうとしていた。ところが、天吾が呼びかけたこの「遠い声」(Ⅲ、P38)のために、青豆は自殺を思い止まったのである。

このように、天吾の行動時間が明示されていないⅡの第⑥⑧章の2章を除く第⑤章以後、二人の主人公に起こった出来事は実は並行しながら同時進行し、最後の第⑫⑬章の2章で合流したと見られる。

⁴ 『1Q84』(Ⅲ、第30章 P576)では、この事について語り手が「そこにいたふかえりはおそらく通過するものだった。それがあの少女にそのときに与えられた役割だったのだ。自分自身を通路にして天吾と青豆を結びつけること。限られた時間、物理的に二人を連結させること。天吾はそれを知る」という説明と、これはこれより先に言ったリーダーの「君の愛する人物と、わたしの娘が力を合わせてそのような作業を成し遂げた。つまり君と天吾くんとは、この世界において文字通り踵を接していることになる」(Ⅲ、第13章 P279)という言葉とは、軌を一にしている。

この点に限って言えば、並行している青豆軸と天吾軸は、回想するため過去に遡った部分があるとしても、全体としては決まった時間的推移の方向に進んでいる。勿論、Ⅱの第⑤章までは、時の確定出来ない出来事が起こった章もあるが、Ⅱの第⑤章以後のリーダー殺しに関連する出来事が同時的に起こったことは以上のように確定できた。ただ、このように青豆と天吾に起こった出来事は最後の第⑳㉑章の2章で合流した形にはなだったが、それは必ずしも主人公の青豆と天吾との再会を意味するものではない。二人の再会は、実にⅢの第㉑章になってはじめて果たされるのである。

2.3 『1Q84』のⅢに見られる時間的推移

『1Q84』のⅢ（全31章）では、「牛河、青豆、天吾」の順番で各章に彼等を主人公としたタイトルが交互に付けられ、村上春樹の小説では初めて見られる三軸の構造である。三軸に増えたⅢの時間的推移は、二軸で組み立てられたⅠ、Ⅱよりも複雑に出来ている。

Ⅲの第⑫章までは各章の時間は明示されていないが、物語を読み進めていく上では、それほど理解は難しくない。しかし、第⑫章から第㉑章までは、物語の進行に時間的推移の逆戻りが生じているため、読みの混乱が生じやすい。混乱を避けるために、Ⅲの第⑫章から㉑章までの要点を抜き出して、表(一)に整理した。

表(一)逆戻りが発生した各章の要点

章	内容の要点整理	説明
第⑫章天吾 (P230-248)	<u>土曜日</u> に父の療養所から東京高円寺のアパートに帰って見ると、留守をしているはずのふかえりはいなかった。夕暮れに散歩に出て、喫茶店「麦頭」に入った。しばらくしてから、店を出て、通りを歩く。	第⑬章(牛河)によって「土曜日」であることが判明した。
第⑬章牛河 (P249-267)	<u>冬の初め</u> (P264)、青豆を追跡するため、青豆と関係がありそうな天吾を監視することにし、天吾が入っている3階建てのアパートの一階を借りた。	
第⑭章青豆 (P268-281)	<u>12月</u> (P269)に、タマルと電話で話した後、老婦人と対話した。老婦人から「てっぺんが扁平でほとんど禿げて、背が低く手脚が短く、ずんぐりしてい」(P278)る牛河のことを教えてもらった。	

<p>第⑮章天吾 (P282-305)</p>	<p>① 12月(P282)のある土曜日の夕方、喫茶店「麦頭」を出た後、児童公園に行って「あと少しで八時になる」(P284)頃、滑り台に上がって二つの月を眺めた。「十五分」(P284)してから、滑り台を降りて、児童公園を出てアパートへ帰った。</p> <p>② 日曜日(P288)に小松に二回電話をして、会社の近くのバーで「七時」(P294)に会うことを約束した。「六時十五分」(P295)にアパートを出て、「七時十五分」(P296)にやって来た小松から誘拐された事件を聞かされた。</p>	<p>第⑫章の続きと見られる。なお、天吾が児童公園に行ったのは、今回で二回目である。一回目はⅡの⑱、⑳章である。その時、青豆に目撃された。</p>
<p>第⑯章牛河 (P306-327)</p>	<p>① 翌日(P306)の午後「二時半」(P312)にふかえりの姿を見かけて彼女を尾行した。</p> <p>② 翌日、NHK 集金人がやってきた。</p>	<p>第⑬章の続きと見られる。</p>
<p>第⑰章青豆 (P328-342)</p>	<p>土曜日、八時に近かった(P328)頃、タマルから電話をもらって、不審な人物、「福助頭」(P335)のあだ名を付けられた牛河のことについて話した。その後、児童公園から離れようとした牛河の姿を見かけた。しかし、先に離れた天吾の姿を見逃した。</p>	<p>第⑭章とは同日のことではないが、第⑭、⑮前半、⑲章の続きと見られる。</p>
<p>第⑱章天吾 (P343-372)</p>	<p>小松の会社の近くにあるバーで小松が誘拐されたことを聞いている。</p>	<p>第⑮章の続きで、日曜日の出来事と見られる。</p>
<p>第⑲章牛河 (P373-398)</p>	<p>① 木曜日(P373)の「十一時過ぎ」(P374)にふかりえが天吾の家を出たことを目撃した。</p> <p>② 土曜日(P381)の「午後三時五十六分」(P385)に帰宅した天吾を目撃した。「七時過ぎ」(P386)にアパートを出て、喫茶店「麦頭」(P387)に立ち寄った天吾の後をつけた。「三十五分後」(P390)喫茶店「麦頭」から出て、児童公園の滑り台に上がって二つの月を眺めた天吾を尾行した。「滑り台の上にはいたのは十五分くらいのもの」(P395)であり、「八時十七分」(P395)に児童公園から天吾が去った後で、一人で滑り台に上がって二つの月を眺めた。滑り台から降りて公園を出た途端、その姿を青豆に目撃された。</p>	<p>第⑯、⑫、⑮後半章の続きと見られる。</p>
<p>第⑳章青豆 (P399-422)</p>	<p>① 日曜日の夜、八時二十三分(P405)に滑り台のてっぺんに座り、空を眺めている「福助頭」(P406)(牛河)を見かけた。牛河の後を付けて、三階建ての天吾のアパートまでにたどり着いた。郵便ボックス</p>	<p>第㉑章の続きと見られる。天吾のアパートから去っていった姿を牛河</p>

	「川奈」(P410)を見て、その部屋番号「三〇三」(P411)の前に立つ。「今の自分にとってそれは何より危険なことだ」(P412)だと判断し、一度天吾のアパートから去っていった。すぐにタマルに牛河の所在を知らせた。	に目撃された。
第⑫章天吾 (P423-453)	月曜日の深夜、午前二時四分(P423)、父の死を知らされ、「四時」(P427)に起きて、支度してから千倉にある父の療養所に出掛けた。	第⑮章の続きと見られる。
第⑭章牛河 (P454-470)	① 日曜日の夕方、六時十五分(P454)にアパートを出た天吾を目撃したが、尾行しなかった。「八時前」(P455)に一人で児童公園の滑り台に上がって二つの月を眺めた。「十五分」(P457)ぐらいして、滑り台を降りて部屋に戻った。「夜の九時前」(P458)、アパートの玄関から出てきた青豆の姿を見かけた。「十時をまわった頃」(P460)眠りについた。「三十分」(P461)ほどして、天吾が帰ってきた。 ② 月曜日の朝の八時過ぎ(P461)、起きて天吾の出勤を確認した。「十一時まで」(P466)監視を続けたが、タマルに侵入された。	第⑯章の続きと見られる。

まず、天吾の軸では、第⑫章→第⑮章→第⑮章→第⑯章のように、物語の時間は明確な順方向(土曜日→日曜日→月曜日)で推移している。土曜日(第⑮章で判明)の午後に千倉にある父の療養所から一度高円寺のアパートに帰って、19時すぎ(第⑮章で判明)に出かけて喫茶店「麦頭」に入った。その35分後(第⑮章で判明)、天吾は「あと少しで八時になる」(P284)頃に児童公園に行って滑り台に上った。「滑り台の上にはいたのは十五分くらいのもの」(第⑮章で判明)であり、夜「八時十七分」(第⑮章で判明)に児童公園から離れた。翌日の日曜日に、久しぶりに小松の会社の近くにあるバーで小松と会い、誘拐されたことを小松から聞かされた。月曜日の深夜、父の死を電話で知らされ、月曜日の未明、千倉の療養所に出掛けた。

次の青豆の軸でも、第⑭章→第⑰章→第⑯章のように、物語の時間はやはり一定した順方向(12月→土曜日→日曜日→月曜日)に推移している。第⑭、⑰の2章では、共にタマルから電話をもらった

airiti

が、第⑭章では老婦人との対話で「いびつな禿頭」(牛河)の存在を教してもらった。それに対して、第⑰章では、土曜日の夜「八時に近かった」(P328)頃に、タマルから電話をもらって「福助頭」(牛河)について話し合ったが、今回は老婦人とは対話をしなかった。老婦人と対話したかどうかによって、第⑭章と⑰章とが、同日に起きた出来事ではないと分かる。また、第⑰章で土曜日にタマルと電話で話していたため、児童公園の滑り台に上がった天吾を見逃してしまった。その代わりに、天吾が去った後、天吾を尾行していた牛河が児童公園から出てゆく姿を見かけた。いわば、語り手が言ったように、「決定的な二十五分間」(P339)のゆえ、青豆は天吾とすれ違ってしまったのである。語り手は、このすれ違いについて「青豆が天吾の姿を目にしなかったことが、不運の成り行きであったのか、あるいは幸運な成り行きであったのか、それは誰にも判断できない」(P339)と意見を述べている。語り手は、理由として、もし青豆が天吾の姿を見て部屋を走り出して20年ぶりの再会を果たしたとしたら、「天吾を監視している牛河には、それが青豆であることがすぐわかっ」(P339)て、「さきがけ」の二人組に即座に通報されてしまったであろうと推理して述べているからである。そして、次の日曜日に滑り台に上がった牛河を見かけてから、タマルに報告せずに黙ってアパートまで尾行したが、意外にも郵便受けの「川奈」の名を見て、天吾らしい人が入居している「三〇三号室」(Ⅲ、P411)の前までたどり着いた。これは、まさに青豆が言ったように、牛河が天吾の所まで導く「案内役」を果たしたことになる。その後、青豆は、回りの状況が危険だと判断し、「三〇三号室」のドアをノックせずに、アパートから去っていったが、そこで牛河に姿を見られてしまった。マンションに戻って来た青豆は、牛河の所在をタマルに知らせた。

最後に牛河の軸でも、第⑬章→第⑯章→第⑲章 →第㉓章のように、物語の時間は明確な順方向(冬の初め→翌日の朝→木曜日、金曜日、土曜日→日曜日→月曜日)に推移している。牛河は、冬の初め、青豆を追跡するために関係のありそうな天吾を監視することにし、

天吾のアパートの一階を借りることにした。天吾を監視している間、ふかえりの姿を見かけて、彼女を尾行した。木曜日にふかえりが天吾のアパートを出たことを目撃した。翌翌日の土曜日に、15時56分に帰宅した天吾を目撃した。19時過ぎに出て喫茶店「麦頭」に立ち寄った後、児童公園まで天吾の後をつけた。夜「八時十七分」(P395)に天吾が先に児童公園を離れた後、滑り台に上がって二つの月を眺めた。公園を出たとき牛河は青豆にその姿を目撃された。牛河は、翌日の日曜日18時15分に出掛けた天吾を目撃したが、尾行しなかった。「八時前」に児童公園に出掛け、滑り台に上がって二つの月を眺めた。滑り台にいる牛河の姿は再び青豆に目撃された。一方、牛河をアパートまで尾行した青豆がアパートを出た姿を、牛河は一階の部屋から目撃し、カメラで撮影した。しかし、月曜日の深夜に牛河は青豆の知らせを受けたタマルに部屋に侵入されてしまった。

以上見てきたように、三軸で物語が進行する第⑫章から⑳章までの山場では、各中心人物の行動の時間帯が詳しく記されている。これは探偵小説のような、事件の推移を時の経過でたどる書き方をしているように見受けられる。また、各軸に即して発展した物語の内容を理解すること自体は、それほど困難ではない。しかし、1冊の本として「牛河、青豆、天吾」の三軸で章立てられたⅢを章の順序通りに読んでいくと、読者は脳裏に刻み込まれた前章の内容に左右され、ややもすれば、次の章をその前章の続きであるかのように読んでしまう錯覚に陥り、物語の理解が阻まれる。第⑫章の土曜日から第⑳章の日曜日にかけての出来事の進展はその好例である。土曜日から日曜日までの出来事を起きた順番に並べ替えると、以下の図(2)になる。

図(2) 起きた順番に並べ替えた各章の出来事

(一)土曜日の出来事

第⑫、⑮前半章(天吾)→第⑱章(牛河)→第⑰章(青豆)

(二)日曜日の出来事

第⑮後半、⑱章(天吾)→第⑳章(牛河)→第㉑章(青豆)

(注 枠囲いは逆戻りを意味する。)

土曜日の出来事では、第⑫、⑬前半章で土曜日に天吾が児童公園の滑り台に上ったと語られた後に続く、同じ土曜日の第⑰章は、自然第⑮章の続きとして理解されやすいが、実は第⑰章は第⑮章だけの続きではなく、第⑲章の続きでもある。こうした点が読む上での混乱を引き起こしかねない。また、日曜日の出来事に関しては、日曜日の第⑮後半章、⑲章の続きは、第⑳章を挟んで第㉑章になる。以上を見て分かるように、物語の進展は飛び石のように各章に跳んでいて、しかも一部は逆戻りしている。これは時間的構造から輻輳した事件を浮かび上がらせる語り手のトリックと見ることが出来る。このように、先に読んだ物語の内容が実は後の章の続きだというトリックが『1Q84』には仕掛けられている。当然、このトリックのために、物語自体ないし物語を読む複雑性が増してくる。

3. 中心人物の配置——二回の逆転の作用

時間的構造を巧妙に組み立てたトリックのほかに、中心人物を巧みに配置することも、語り手が使ったもう一つのトリックとして見ることが出来る。

3.1 天吾への牛河の監視

牛河と天吾との関わりであるが、「財団法人新日本学術芸術振興会専任理事」(Ⅱ、P41)の肩書きを持っている牛河はⅡに初登場し、「助成金の候補者」(Ⅱ、P48)の推薦を名目にして天吾を塾に訪ねた。その後、一回目は天吾の自宅へ電話(Ⅱ、P132-141)し、塾へ二回目の訪問(Ⅱ、第10章)をした。「さきがけ」が一枚噛んでいる可能性も否定できない(中略)この団体とは関わり合いにならないのが賢明だろう(Ⅱ、P121)と小松に手紙で忠告された天吾は、二回目に訪ねて来た牛河が持ち出した助成金の話しをはっきりと断った(Ⅱ、P221)。この訪問では、「安田恭子」という名の年上のガールフレンドを始め、『空気さなぎ』の改作、天吾自身には全く知りようもない母のことまでが徹底的に身辺調査されたことを牛河に仄めかされた。

この時点で、『空気さなぎ』の改作を理由に天吾に近づいた牛河は、宗教集団「さきがけ」のリーダーが亡くなり、天吾と青豆が通った立川小学校を訪問した後、「当分の間川奈天吾の動きを見張ろう。彼がおそらく俺をどこかに導いてくれるに違いない」(Ⅲ、P211)と勘づき、「天吾と青豆とのあいだの「繋がり」を明らかにする」(Ⅲ、P254)ために、天吾を監視することにした。

3.2 青豆への牛河の追跡

牛河と青豆との関わりであるが、Ⅲでは、リーダーを殺した青豆の行方の捜査を宗教集団「さきがけ」の二人の幹部に頼まれた牛河は、「専門の調査エージェント」(Ⅲ、P254)である「コウモリ」という人に青豆関係の情報を依頼した際、「俺はあんたに追いつくよ、青豆さん、あんたはなかなか頭が切れる。腕もいいし、用心深い。しかしね、俺はしっかり追いつく。待っていてくれ。今あんたの方に向かって歩いていく途中だ。足音は聞こえるかね？」(Ⅲ、P133)と心に思った。そして、青豆関係の情報を入手した後、青豆が天吾と同じ市川市立小学校、同じ学年にいたことに気づいた牛河は、また「青豆さん、俺の足音は聞こえるかい？たぶん聞こえないだろう。なるだけ音を立てないように歩いているからね。しかし、俺は一步また一步とそちらに近づいている」(Ⅲ、P147)と、青豆狩りへの成功を確信する。ここでは、天吾への監視がすなわち青豆への追跡に繋がっていることが再確認された。

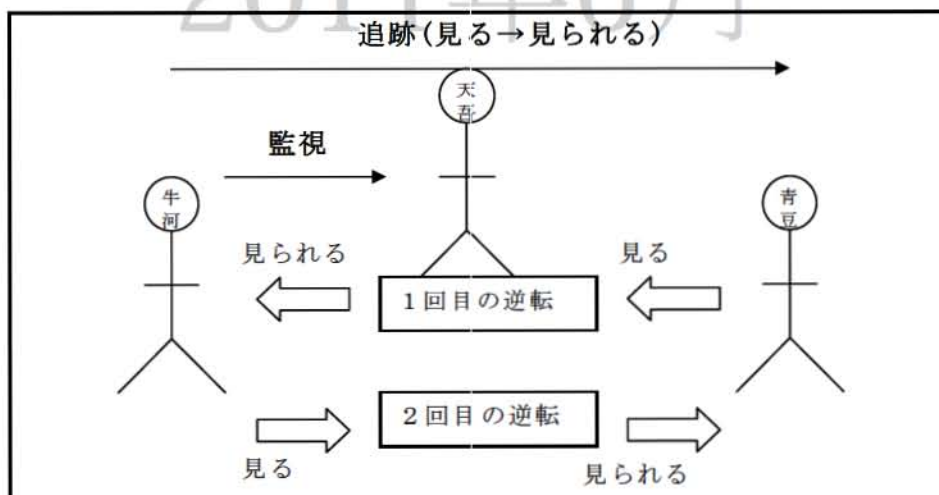
3.3 牛河、天吾、青豆の関係図——二回の逆転

上述の三者の関係を踏まえて、図(2)を再び見てみよう。図(2)のように、Ⅲの出来事によって章の順番を入れ替えても、中心人物「天吾→牛河→青豆」の順番は変わらないが、さらにそれを追いかける関係に置き換えると、「天吾←牛河←青豆」と逆方向になる。言い換えれば、天吾を監視している牛河を、牛河が追跡したい青豆が見ているという配置になるのである。本来は標的を追いかけるはずの追跡者の牛河が、かえって標的の青豆に見られていることを図式にすると、「見られる者／追跡者(牛河)と見る者／被追跡者(青豆)」の構

図が成立する。Ⅲの人物関係は、見る者のはずの追跡者牛河がいつしか見られる者となり、また見られる者のはずの青豆が逆に見る者となって、ここで一回目の逆転が生じていると言える。

一方、牛河の追跡に対して、青豆は「おそらくは教団の人間だろう。そして疑いの余地なく辣腕の追跡者だ」(Ⅲ、P406)と確信し、「なにしろ追跡されるものが追跡のあとをつけるのだから」(Ⅲ、P407)と反撃態勢を取った。日曜日に滑り台にいた牛河を見かけて、天吾の三階建てアパートまで尾行し、青豆は天吾の所在を見つけたが、アパートから出た姿を牛河に部屋から見られたことによって、「見られる者／追跡者(青豆)と見る者／被追跡者(牛河)」の構図が出来た。追跡される者のはずの青豆が追跡者の牛河の後を追いかけて追跡者の牛河に目撃されるという二回目の逆転が生じた。しかし、この後皮肉にも追跡者の牛河は追跡される者に通報され、殺されてしまったのである。語り手が使った中心人物の配置というトリックによる二回の逆転は物語の持つミステリー性を倍増する追跡物語としての高い完成度を見せている。それを図式化すると、図(3)のようになる。

図(3) 牛河、青豆、天吾の三人の関係図



図(3)のように、教団に青豆の消息を掴むことを頼まれた牛河は当然「見る者」であり、追われる青豆は「見られる者」となる。しかし、最初に児童公園から出た牛河の姿を青豆が見たことによって、牛河は「見る者」から「見られる者」に転化し、青豆は「見られる者」から「見る者」に転換した。ここで一回目の逆転が生じている。その後、天吾の三階建てのアパートまで牛河を尾行して、離れようとした青豆の姿を牛河が見たことによって、牛河は「見られる」から「見る者」に戻り、青豆は「見る者」から「見られる者」に戻った。ここで二回目の逆転が生じている。牛河と青豆とのこうした追跡ゲームがⅢで前景化したために、Ⅰ、Ⅱで重要な主人公の一人であった天吾⁵は後景化せざるを得なくなったが、牛河と青豆との対決においては、勝負が判明するまで逆転を二回重ねたことが、追跡物語の特性を色濃く、大きくクローズアップしていると見られる。

4. 牛河という人物の存在意義——追跡物語が成り立つかなめ

青豆に言われた通り、牛河は確かに天吾の所まで青豆を導いた「案内役」であり、Ⅲの「進行役」⁶とも、「役回り」⁷とも言われている。また、天吾、青豆を中心人物にしたⅠ、Ⅱだけを読むと、腑に落ちない多くの描写は牛河の章を増やしたⅢから解答を得ることができ、まるで一種の謎解きのようなものである。平居謙はこれについても、Ⅰ、Ⅱの「不審な点をかなりカバーし、これまでの村上春樹の長編小説に比べると、比較的謎が謎のまま残されるということは少

⁵ 平居謙も同じ見方を示し、「天吾は三番目に格落ちである」（『村上春樹の『1Q84BOOK3』大研究』（2010）データハウス P22）と指摘している。

⁶ 同前掲平居謙書 P49

⁷ 円堂都司昭(2010)は、「牛河」という人生『1Q84』で名探偵になりそこねた男』『総特集村上春樹—『1Q84』へ至るまで、そしてこれから・・・』第42巻第15号青土社 P131 では、「牛河は、膠着状態に陥りかけた物語展開に油を注ぎ、推進力をアップさせる役回りなのである。牛河の存在がなければ、『ねじまき鳥クロニクル』も『1Q84』も、三冊目まで書かれるような物語の推進力は得られなかったに違いない」と指摘している。

ない」⁸と述べ、同じ見解を示している。例としてⅠ、Ⅱでしつこく繰り返された天吾の母に纏わる「一歳半の記憶」⁹が挙げられる。Ⅲの、「二歳になる前に長野県の温泉で絞殺された。殺した男はとうとう捕まらなかった。彼女は夫を捨て、赤ん坊の天吾を連れてその若い男と逐電していた」（Ⅲ、P462）という牛河の調査結果からは、母に纏わる天吾の「一歳半の記憶」を生成させた出来事が推測できる。牛河の調査によって判明したという形で、前の2冊で繰り返された謎めいた内容を3冊目で明らかにするという手法は、語り手が仕掛けた二つのトリック（時間的構造、中心人物の配置）と絡めて考えると、そこでの牛河の存在が決して単なる「案内役」、「進行役」、「役回り」に止まるものではないことが分かる。

4.1 『1Q84』に欠かせない人物

『1Q84』では、二つのトリック（時間的構造、中心人物の配置）を使うことによって、読みの複雑性とミステリー性が相乗する追跡物語風の効果を物語に強く出している。そのトリックが絡み合っているかなめとして、牛河は欠かせない存在である。牛河の重要性を裏付けるものとして、青豆と牛河との対決がⅢでの主軸とされている点をあげられる。実のところ、追跡される青豆が追跡する牛河を見ることには限界があり、いわば追跡者の全体像の把握は出来ていない。青豆には牛河が天吾を追いかける前半部はまったく見えず、牛河を「さきがけ」の追跡者だと確信していても、牛河と対決する後半部しか視野には入らないため、結局牛河が追いかけていた目標者である天吾を見逃してしまったのである。結果的に天吾との再会は後に伸ばされ、再会する困難さが増してしまったわけである。これはリーダーが青豆に言った「君は重い試練をくぐり抜けなくてはならない」（Ⅱ、P291）という予告通りである。前景化された追われる青豆と追跡者牛河との対決自体が牛河という人物の存在の重要性を

⁸ 同前掲平居謙書 P68-69

⁹ 母をめぐる天吾の「一歳半の記憶」は、Ⅰの第2、8、14、22章、Ⅱの第6.8.20章で繰り返されている。

説明している。また、「醜い少年」から、「醜い青年」、「醜い中年男」(Ⅲ、P253)になった牛河を、「外見はかなり人目を惹く。見張りや尾行をするには不向きだ」(Ⅲ、P249)と語られていることは、確かに満員電車の中で牛河の「隣の席に座ろうとする乗客は一人もいなかった」(Ⅲ、P211)り、「人生のどの段階にあっても、道ですれ違う人々はよく振り返って」(Ⅲ、P254)見たり、「子供たちは遠慮なくじろじろと正面から」(Ⅲ、P254)顔を眺めたりするというような描写にも反映している。それにもかかわらず、外見が人目を惹くほど目立っていて見張りの仕事には向かない牛河を敢て追跡者に設定したのは、上述の複雑性、ミステリー性とのアンバランスを生じさせている点で一種の滑稽さを感じられ、はらはらしながら読む追跡物語『1Q84』の別な面白さを生む要素にもなろう。これは作者による読者の読みへの戯れの設定として見てもよかろう。

4.2 螺子のような存在の人物

Ⅱではまだ正体がはっきりしない牛河が、Ⅲでは青豆、天吾と並列する形で各章の中心人物とされている。もし、Ⅰ、Ⅱと同じようにⅢでも青豆と天吾を奇数章と偶数章の主人公にする章立てであったら、青豆と天吾との二つの軸はいつまでも平行し続けるであろう。たとえ平行し続けなくても、どこかで合流し、結末を迎えるはずであろう。しかし、Ⅰ、Ⅱと同じようなパターンを取らずに、牛河の章を設けたⅢは、それ故Ⅰ、Ⅱよりも多くの複雑性とミステリー性を内包する追跡物語となったわけである。この追跡物語において牛河のような存在を章立てずに、中心人物の位置から除いてしまうと、追跡物語に仕立てられた『1Q84』の構造全体が崩れてしまうに違いない。

Ⅲに設けられた牛河の章については、「作者のサビース精神」¹⁰によって、「読者の反応への応答として牛河には「章」があてがわれた」

¹⁰ 同前掲風丸良彦書 P205

¹¹との風丸良彦の指摘がある。しかし、『1Q84』を追跡物語風に仕立てる方向に転換させ、複雑性、ミステリー性、滑稽性をミックスした追跡物語を成り立たせる点から考えると、牛河は「案内役」、「進行役」、「役回り」を果たすだけの人物だけではなく、『1Q84』を追跡物語風に仕立てる上で、横糸としてのすべての断片を繋ぎ止める縦糸の役割を果たす重要な人物だと言える。

5. 二元対立的描写から立体的描写への新しい試み—漱石と比較して

『1Q84』までの村上春樹の作品構成を振り返って見よう。加藤典洋は村上春樹の小説の原形について、「一本の線を境に彼の世界は二つに分かれる。生者と死者、昼と夜、肯定と否定」¹²と指摘している。これは村上春樹の発想の回路を「対立したその二つは一種の合わせ鏡的な像を共有していたのではないか」¹³と喩えた清水良典の主張と暗合している。この二元対立的描写、共用する一種の合わせ鏡的な像は、『1Q84』の前作である長編小説『海辺のカフカ』にもよく現れている。しかし、二元対立的描写、対立的構図は、『1Q84』に至って、上述のような時間的構造、中心人物の配置から窺える立体的描写の手法へと変わっており、これは村上春樹が見せた新しい作品構成だと言えよう。これによって、「80年代の漱石」¹⁴と呼ばれる村上春樹は、後期作品で立体的描写の手腕を見せた漱石に一歩近づ

¹¹ 同前掲風丸良彦書 P205

¹² 加藤典洋(2006)『村上春樹イエローページ1』幻冬舎 P35-36。なお、P36では加藤典洋が村上春樹が述べた「僕の中には(今存在するもの)と(かつて存在し、今は存在しないもの)というふたつの世界に物事をわけて考える傾向がある」に触れた。

¹³ 清水良典(2006)『村上春樹はくせになる』朝日新聞社 P18

¹⁴ 平居謙(2009)「視角 35 村上春樹をもっと知るための7冊⑤」村上春樹研究会編『村上春樹の「1Q84」を読み解く』P84 データハウスでは、「僕自身は漱石の小説は大好きで、「村上春樹が80年代の漱石」と呼ばれることはどちらかといえば、納得がゆく方だった」とされている。日本のモダンとポストモダンの連続性という視点から本格的に漱石と村上春樹を論じた半田淳子(2007)『村上春樹、夏目漱石と出会う』若草書房という論究がある。

いたと見てよかろう。日本のモダンとポストモダンの連続性という視点から漱石と村上春樹を論じた半田淳子の論説に示唆され、同じ漱石文学の中で初めて立体的描写を試みた『彼岸過迄』を採り上げて、『1Q84』との比較を以下に素描として試みることにする。

5.1 探偵小説風の作品『彼岸過迄』(1912)の概観

漱石は大病後(通称、「修善寺大患」¹⁵と言う)、序文の「かねて自分は個々の短篇を重ねた末に、その個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く讀まれはしないだらうか」¹⁶という趣向に基づいた探偵小説風の作品『彼岸過迄』(1912. 1. 1. ~ 4. 29)を朝日新聞に連載し、作風を一変した。その後続く『行人』(1912-1913)、『こゝろ』(1914)も同じ趣向で短篇を重ねて長篇とした創作である。また、短篇の語り手を変えながら、事柄に対して多元的見方を示し、事件の実態に迫っていく手法を採っている。いわゆる語るものと語られるものという二元対立的描写ではなく、立体的描写を産出したのである。序文「彼岸過迄に就て」を除き、「風呂の後」、「停留所」、「報告」、「雨の降る日」、「須永の話」、「松本の話」、「結末」の7章によって組み立てられた『彼岸過迄』では、最初の3章「風呂の後」、「停留所」、「報告」が第三人称の語り手が語った登場人物敬太郎の探偵譚であり、「雨の降る日」の登場人物である千代子が語った雨の日に来客に会わない松本の秘密、「須永の話」の登場人物である「世の中と接觸する度に内へとぐるを捲き込む性質」¹⁷を持つ須永が語った自分の出生の秘密、「松本の話」で須永の叔父松本が語った須永の出生の秘密と千代子との難航した恋という構成になっている。探偵の任務を頼まれた敬太郎は「少しも捕まへ所のない」¹⁸と思いながらも、依頼主田口に「貧しい報告」

¹⁵ 前作『門』が1910年6月に連載完結後、胃潰瘍のため、東京長与病院に入院し、東京近辺の修善寺温泉に転地療養に出掛けたが、大吐血で意識が不明し、危篤状態に陥ったことを指す。

¹⁶ 「彼岸過迄に就て」(1975・初版1966)『漱石全集』第5巻岩波書店 P7

¹⁷ 「松本の話」(1975・初版1966)『漱石全集』第5巻岩波書店 P299

¹⁸ 「報告」(1975・初版1966)『漱石全集』第5巻岩波書店 P145

¹⁹をし、「地位に有つく事は出来た」²⁰。敬太郎の探偵譚の表層的構造の後に続く、須永の出生の秘密は本格的に心理を探偵する深層的構造をなしている。このような表層と深層の重層的な探偵小説風の構造が『彼岸過迄』に明確に見られる。こうした構造をなした『彼岸過迄』の醍醐味は、まさしく伊藤秀雄が『彼岸過迄』で漱石が探偵小説味で描いたのは、読者に謎を投げ引っぱって行く方便であって、須永の自我の真実の姿として定着させることが本来であったはずであるから、読者はそれ以上の小説味を求めるべき筋ではなく、この作はこれで立派に完成していることは自明のことであった²¹と評価した通りである。また、探偵を極度に嫌った漱石²²が『彼岸過迄』で試みた方法は、伊藤秀雄が指摘した「人間心理の奥底を深く洞察して行き、人間性の真理を追究しよう」²³という一言に尽きていると言ってもよからう。

5.2 『彼岸過迄』と『1Q84』との対照比較

従来それぞれの創作において、今までと違った書き方をした『彼岸過迄』と『1Q84』とを比較すると、次のような異同が見られる。

まず、異なる主人公を各章のタイトルにした『1Q84』は、『彼岸過迄』のように短篇を重ねて長篇とした創作ではないが、話を交互に展開し、事柄に対して多視点の多元的見方を示し、事件の実態に立体的に迫っていく点では共通している。

また、『彼岸過迄』に多用された「探偵」ではなく、『1Q84』では、「見張り」、「尾行」、「聞き込み」、「監視」、「追跡(者)」、「専門の調

¹⁹ 「報告」(1975・初版 1966)『漱石全集』第5巻岩波書店 P145

²⁰ 「結末」(1975・初版 1966)『漱石全集』第5巻岩波書店 P334

²¹ 伊藤秀雄(1998)「漱石の探偵小説——『彼岸過迄』を中心として」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第11号翰林書房 P132

²² 宮崎隆広「探偵」(1990)『別冊國文學夏目漱石事典』39 學燈社 P182-183 によると、「探偵」という言葉の使用頻度が目立つ作品は『吾輩は猫である』(1905-1906)、『趣味の遺傳』(1906)、『坊っちゃん』(1906)、『草枕』(1906)、『彼岸過迄』(1912)、『明暗』(1916)であり、主に文明批評的文脈の中で使用されているという。

²³ 同前掲伊藤秀雄論文 P131

査エージェント」のような言葉遣いが小説に頻出する。これらの言葉の使用から、両作品が持つ探偵小説風に意識されたスタイル²⁴が窺われる。さらに、『彼岸過迄』の「探偵」から『1Q84』の「見張り」、「監視」、「聞き込み」へと変化した言葉遣いは、時代と共に移り変わった探偵小説や推理小説の言語感覚を表している。

また、『彼岸過迄』では探偵を依頼主田口に頼まれた敬太郎は一応仕事を達成したが、『1Q84』では天吾を監視し、青豆を追跡する牛河は、突き止めたい事実を解き明かせないまま殺されてしまった。敬太郎が探偵したことを依頼主田口に報告出来たところで、須永の出生の秘密を探り出すという本格的な探偵が始まる。一方、青豆の追跡を頼まれた牛河が死んでしまったところで、追跡物語は青豆と天吾とが再会を果たす恋愛物語²⁵に成就した。探偵小説として読むことが出来る両作品では、共に探偵行動を完了した所で、須永と千代子、天吾と青豆との恋愛話²⁶が展開されている。

以上、素描したにすぎないが『彼岸過迄』と『1Q84』には、立体的描写、探偵小説風の言葉遣い、探偵後の恋愛話への展開という三つの共通点を見ることができる。両作品とも各自の従来 of 文学創作の新しい段階への深化として、漱石も村上も同じ手法を試みたと言

²⁴ 『彼岸過迄』を探偵小説と読むことに異論はないが、『1Q84』を探偵小説風に読むことについては、沼野充義の先行論究がある。ただし、内田樹・都甲幸治・沼野充義「鼎談」(2010)『文學界』7月号文芸春秋 P163では、沼野充義は「このプロットの進め方は犯罪小説とか探偵小説のスタイルです」と指摘したが、具体事例を明示していない。

²⁵ 同前掲風丸良彦書 P61では、「『1Q84』は一般的には思想小説と言われますが、否、それは恋愛小説であると私は断言します」と風丸良彦が固く主張している。一方、同前掲平居謙書 P78では、『1Q84』Ⅰ、Ⅱは、よく小説論小説と言われる村上春樹の小説と同じ趣を持っているが、Ⅲになると、「シンプルでピュアな恋愛小説となってゆく」と平居謙が見解を示している。『1Q84』が恋愛小説である点に論者は賛成の意を表したい。

²⁶ この点については、内田樹・都甲幸治・沼野充義「鼎談」(2010)『文學界』7月号文芸春秋 P161では、沼野充義は「特にBOOK3は青豆を追跡する探偵小説というのが前半で、後半になると甘いラブロマンスみたいな「ボーイ・ミーツ・ガール」小説になっていく。だから、今回は大衆小説的なつくり方をあえて積極的に取り込んで書いているという感じがします」と主張している。

えよう。

5.3 新しい作品構成を試みた『1Q84』

『1Q84』で使用した立体的描写、探偵風の言葉遣い、探偵後の恋愛話への展開の3点のうち、特に二元対立的描写より複雑な立体的描写は画期的である。村上春樹の創作においては、デビュー作『風の歌を聴け』(1979)が二元対立的描写の始まりとされている²⁷。この作品に描かれたのは19日間の出来事のはずだったが、物語は到底19日間に収め切れないことについては、加藤典洋の「ケアレス・ミス」²⁸説に対して、石原千秋は「テキストのほころび」²⁹説を主張している。しかし、1979年にデビューしてから約30年後に試みた、より複雑な立体的描写による探偵小説風作品『1Q84』には、時間的ズレやテキストの破綻は見られない。また、上述の時間的構造、中心人物の配置を含めて、そうした構成要素を矛盾なく細部まで精密に計算していないと、このような複雑な作品は到底書き上げることができるものではない。この点において言えば、村上は新しい方法を試みただけではなく、一段と書き方を磨いた成長ぶりを示していると言っても過言ではない。

6. 結論

『1Q84』のⅠ、Ⅱとは違って、青豆、天吾以外に、Ⅱの第2章に初登場した牛河の章をⅢに設けたことへの解明を進めたところ、語り手が仕掛けた2つのトリック、言わば時間的構造と中心人物の配置に気づいた。物語に物語読みの複雑性、ミステリー性を相乗した効果をもたらしたこの2つのトリックによって、追跡物語が形成されている。しかも、形成するかなめに牛河が位置づけられている。人目を惹くような「醜い」外見が見張りに向かない牛河を取って青豆の追跡者として登場させた滑稽さは、この追跡物語に格別な一味を

²⁷ 同前掲加藤典洋『村上春樹イエローページ1』幻冬舎 P35-36

²⁸ 同前掲加藤典洋『村上春樹イエローページ1』幻冬舎 P25

²⁹ 石原千秋(2007)『謎とき村上春樹』光文社 P45

加えている。こういった様々な工夫は、読者の読みへの戯れとも言え、今まで例のない作品構成上の創意に溢れた小説となっていると思われる。

また、『1Q84』のように事柄に対して多くの視点から多元的見方を示し、事件の実態に立体的に迫っていく点からは漱石の『彼岸過迄』が思い出されよう。「探偵」、「見張り」のような、時代と共に使用される用語の移り変わりは見られるにしても、両作品が探偵小説風の物語に仕立てられたことには変わりはない。また、探偵の任務が完了したか否かの相違は見られるが、両作品とも、探偵物語を一つの層にして同時に恋愛物語(『彼岸過迄』は須永と千代子との難航する恋、『1Q84』は青豆と天吾との実った恋)がもう一つの層として重層的に描かれている。

従来の二元対立的描写の元始と言われたデビュー作『風の歌を聴け』と比べて、事柄に対して多元的見方を示し、事件の実態に迫っていく『1Q84』の立体的描写には、時間的ズレやテキストの破綻が見られず、比較的不可解な空白、説明不可能な箇所が少ないように見受けられる。従来から反復されていた平面的二元対立的描写から『1Q84』の多重立体的描写へとジャンプした村上の作品構成の洗練には目を見張るものがあり、現代日本語小説の中でも革新的な可能性を持っている作品の一つと言えるであろう。

テキスト

(1975・初版 1966)『漱石全集』第5巻岩波書店

(2009)『1Q84』BOOK1、BOOK2 新潮社

(2010)『1Q84』BOOK3 新潮社

参考文献

1. (1990)『別冊國文學夏目漱石事典』39 學燈社
2. 加藤典洋(2005・初版 1996)『村上春樹イエローページ』荒地出版社
3. 井上ひさし(1997)「謎と発見」『群像日本の作家 26 村上春樹』小

学館

4. 伊藤秀雄(1998)「漱石の探偵小説——『彼岸過迄』を中心として」小森陽一・石原千秋編『漱石研究』第11号翰林書房
5. 加藤典洋(2004)『村上春樹イエローページ PART2』荒地出版社
6. 加藤典洋(2006)『村上春樹イエローページ 1』幻冬舎
7. 清水良典(2006)『村上春樹はくせになる』朝日新聞社
8. 半田淳子(2007)『村上春樹、夏目漱石と出会う』若草書房
9. 石原千秋(2007)『謎とき村上春樹』光文社
10. 平居謙(2009)「視角 35 村上春樹をもっと知るための7冊⑤」村上春樹研究会編『村上春樹の「1Q84」を読み解く』データハウス
11. 平居謙(2010)『村上春樹の『1Q84 BOOK3』大研究』データハウス
12. 風丸良彦(2010)『『1Q84』集中講義』若草書房
13. (2010)『文學界』7月号文芸春秋
14. (2010)『総特集村上春樹—『1Q84』へ至るまで、そしてこれから・・・』第42巻第15号青土社

付記

本論文は台湾日語教育学会 2010 年大会で口頭発表した内容を全面的に改稿し、また審査委員のご叱正によって必要部分に加筆、訂正を行ったものである。懇切なご指摘をいただいた諸賢、審査委員の先生方に心から御礼申し上げます。

2011 年 2 月 28 日原稿受領 2011 年 3 月 21 日審査通過